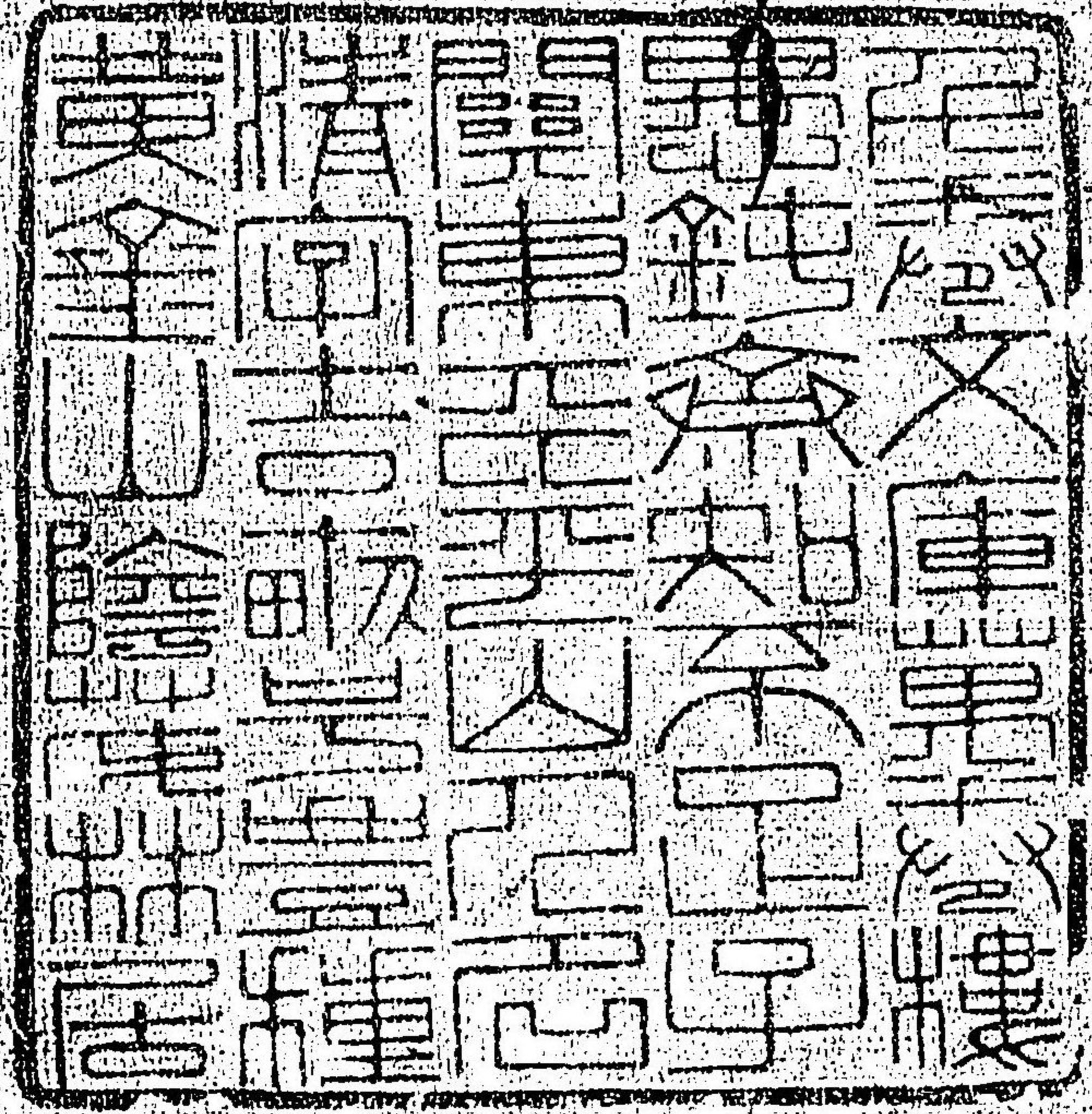
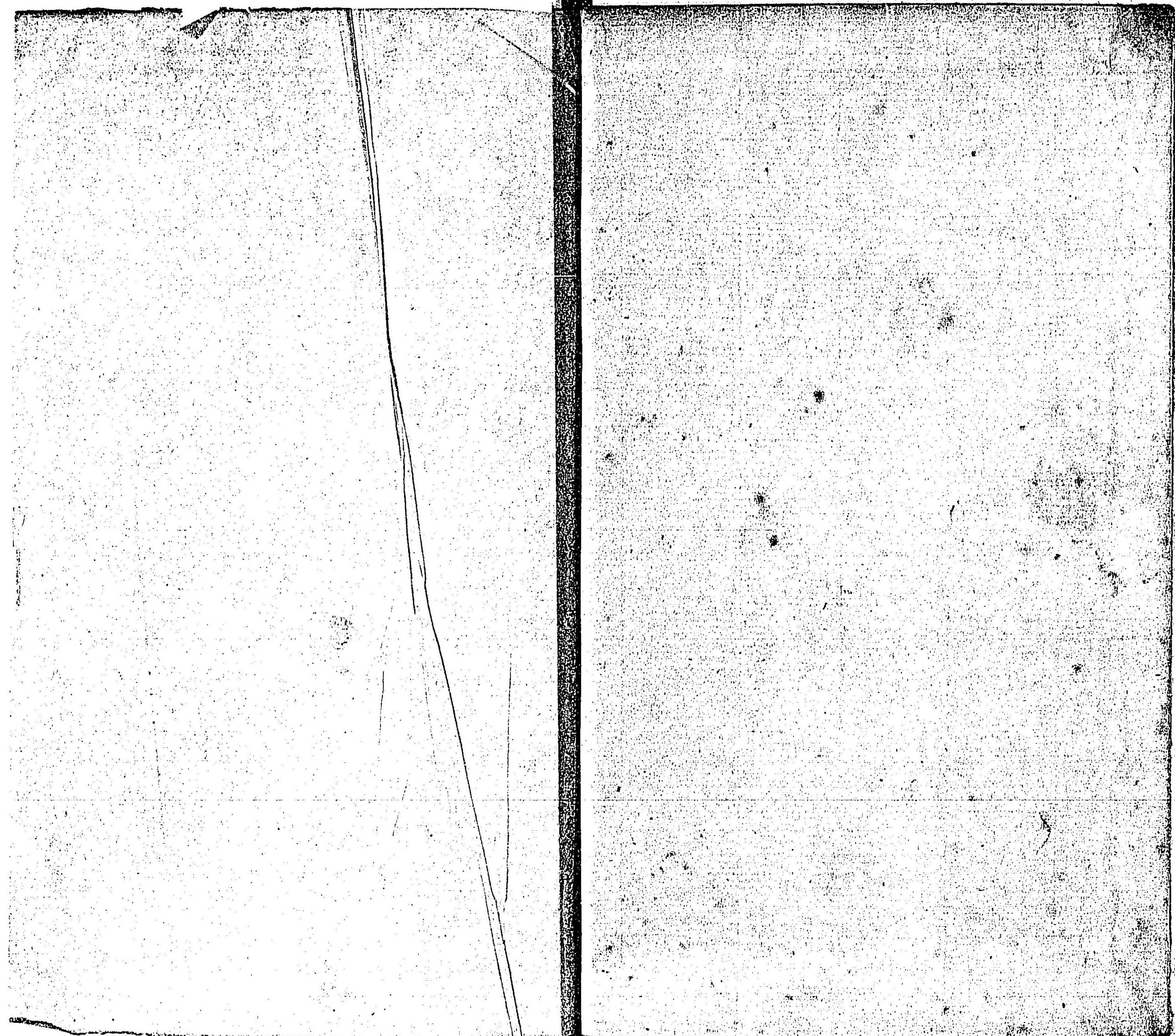


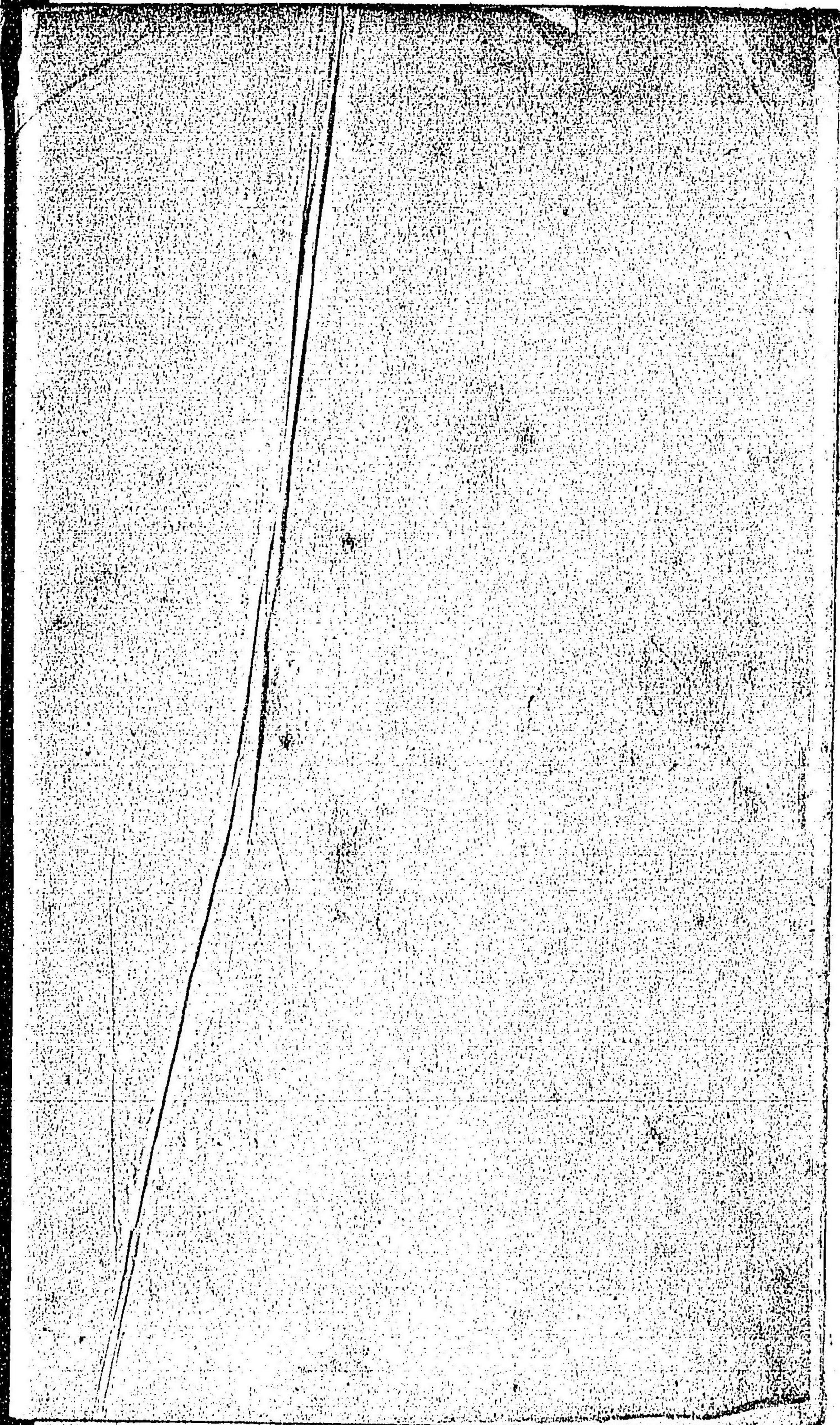
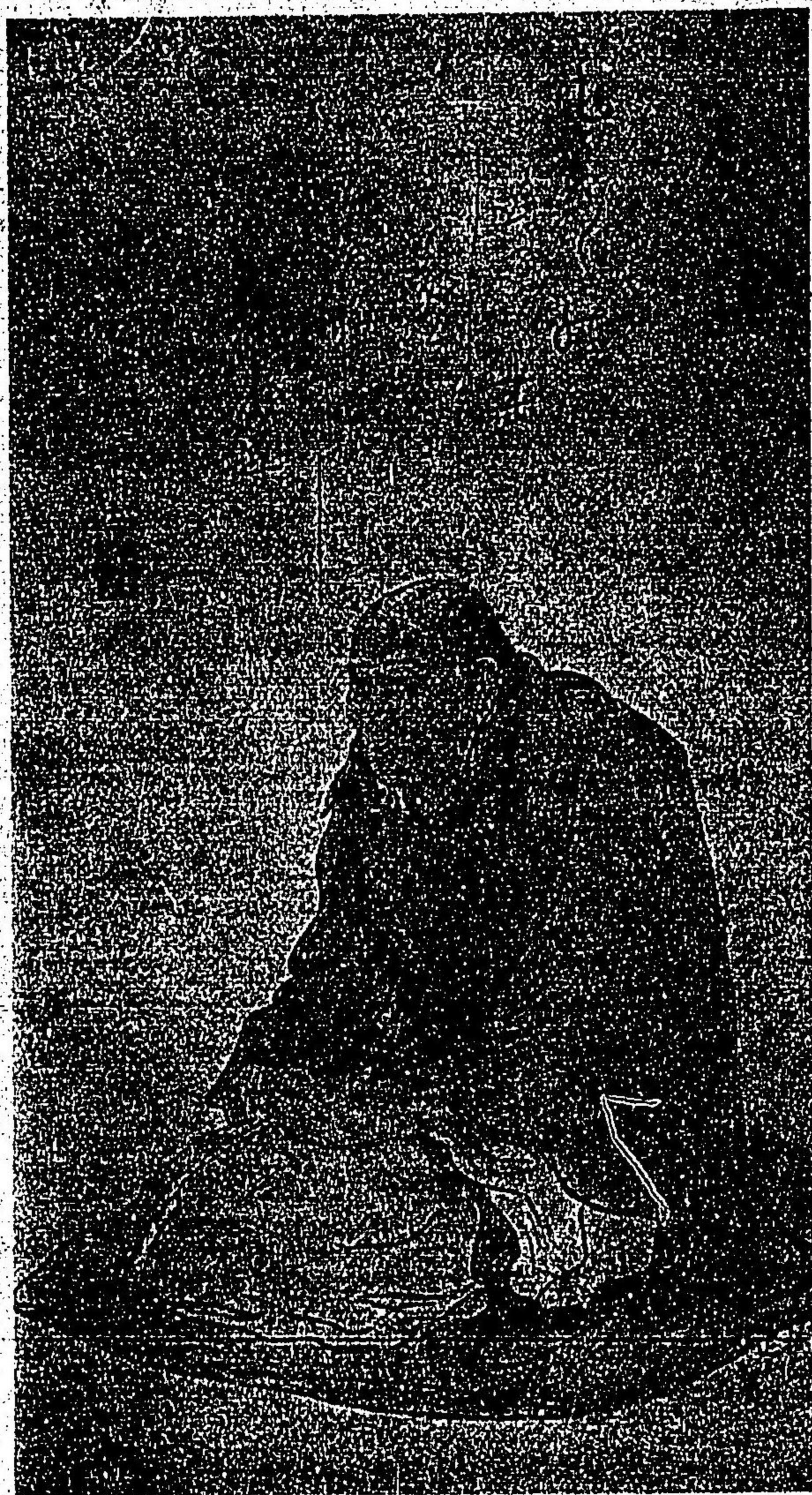
246
27

Handwritten vertical text in cursive script, likely a signature or title.

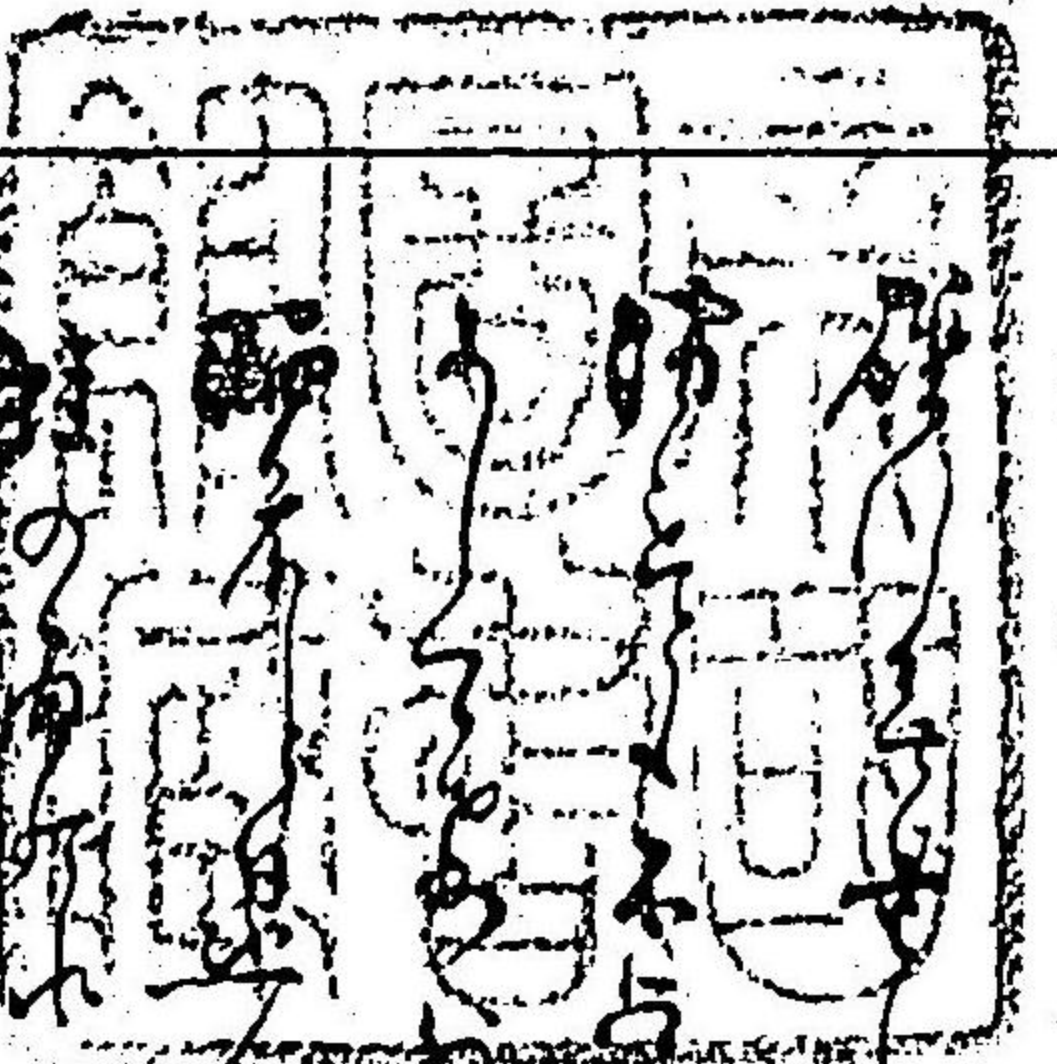


Small vertical text or characters located to the right of the large rectangular seal.





Handwritten text in a cursive script, possibly a letter or a list, enclosed in a rectangular border. The text is arranged in several lines, with some characters appearing to be stylized or decorative. The script is dense and difficult to decipher without a key.



Handwritten text in a circular stamp or seal impression, located at the bottom of the page. The text is arranged in a circular pattern and is difficult to read.

Handwritten text in a cursive script, likely a letter or a personal note. The text is written in a fluid, connected style characteristic of the 'sōsho' (草書) style. It appears to be a collection of several lines of text, possibly a signature or a short message.

年一山人
方國草間
雁
路
中
人
山

子日

子日には野への小松も翠のねをあらはしてひく雲の上人

初春鶯

うくひすのはつ音のつゝみうちならしさても辭かな春は來にけり

七種

七種の鳥はものかは兩隣たゝさかこせし眞名板の音

若菜

けふつめは若菜のかたをおもかちと芹もとりかち舟岡の野邊

霞

たき木ともなる松島の浦つたひ霞のけふりたてるしほかま

かれくし木々にも雪の花さけは霞の幕をはるのさは煙

鶯

うくひすに虎うそふけとかなふまし萬里の敷に初音おこせは

うくひすをぬしきゝなんしすかゝきの音も面白さけいせいかな

鶯知春

音を出して温公よりも智恵ふかし瓶のこほりもくたくうくひす

古巢鶯

うくひすの谷の古巢にやゝなくは親のますやら遠くあそはて

梅近聞鶯

我宿によくそきなける鶯よ褒美にはなをやり梅の枝

残雪

孫康かあかりとなせし白雪もはやさえかゝる春のわけはの

稻荷山こたちの森に白狐はとのこんの雪は花と化けたり

梅

うめかえは朝日にかほる源氏香すゑ摘花にとめてきくらし

尋梅

はるくどけふささらさの道すからきくうの宿の梅はさきしか

柳

春かせの手よりくりたす水車淀のわたりの青柳の糸

早蕨

きゝすなく小笹のもとに手を出してけんをもうつの山の早蕨

野早蕨

雷はまたならねとも飛火野にかきの手見ゆるはるの早蕨

初花

日本木の第一巻の花なれば神代さくら初ひらきを見ん

思花

ぬる間にも莊子の夢の蝶となり花のはどりを舞ひありきたや

歸雁

氏なくて雲井にのほるかりかねは地下より玉のこしにうつるか

春雨

音もなくねはんの頃は草木までゆをふかせぬる春雨の空

春駒

將基にはわらて香車の鍵たてゝひしやておふ手の年頭の駒

喚子鳥

おのか名を人かよふかよふて鳥あはての杜の山彦のこゑ

苗代

去年の秋米をかりたる賤の男もこの頃かへす小田の苗代

萱

むらさきのゆかりの油煙あるところは萱もにはふ奈良の名産

杜若

紫のつほみのふてを持ちあけてすみえに花をかきつはたかな

藤

業平の東下りか藤の花江戸にゆかりの色ましてさく

水道款冬

水邊の岸も高田の馬場までもささきのほりたる山吹の花

暮春雨

春の日ををしみてぬらす我袖をふりきつてゆく雨の足早

三月盡

山かけに春なかれゆく曲水をけふはとむへきさか月もなし

夏之部

更衣

わたぬきて嫁と聲との顔あはせ色なほしやら衣かへやら

卯花

玉川に卯木の花のさくころはよなへに布をさらすかどみゆ

葵

神路山くらへの駒と葵艸いつれもかけるものにそありける

時鳥

ほととぎす江戸に一本の松魚よりくつとねたかき中空の聲
春夏のあひの山路のほととぎすないてすきゆくたまのひと聲

朝時鳥

あけはのゝ手水盤にむく頃は日々にあらたにきくほととぎす

夕時鳥

楡の羽をそらにひくなるほととぎすさみたれかみもゆふ方の空

關路時鳥

ほととぎす夜あかしないて須磨の關はのゝあけに島かくれゆく

菖蒲

たちならふあやめかきつの色競中に菖蒲の花やさきけん

五月五日

百薬の長にかけんの菖蒲太刀酒で病の根をやさるらん

早苗

早乙女の早苗を植るこなたには蛙もともにならうたをうたふて

照射

雑鳥にあらてつまこふいもせ山鹿をいるかの吉野狩人
ともしする夏の夜中のあつさゆみ鹿を入佐の山の狩人

五月雨

しらいとの瀧もかた／＼音たて／＼布をおりたる五月雨の頃

橋

たちはなは小島かはなのさきかけて香をたて渡す浮舟の棹
横はひにかに／＼はひくる花みればさる御やしきのかきの橋

螢

春日野の敷のとうろうに飛螢人のともさぬひともしの影

夜水鶏

月のさす柴の戸口をた／＼くゆる音とうかどとへは水鶏なりけり

蚊遣火

門口に多葉粉無用の札張て蚊にはくゆらす軒の蚊やり火

夏月

さかつきもまうひけ四つの夏の月あつさめぬにむかひ酒とは

蓮

妙法の蓮華はいまたつはみなり普門はんにはひらきそろはん

池蓮

豆はとの露をとつくりうけ持て手玉にとれる池のはちす葉

蟬

空蟬は光源氏の巻はしら關屋の里にないてやとり木

氷室

關ならでかたく戸させし氷室守南より来る風はとほさし
世の中の氷無月なれば氷室守去年のしこみの雪やさ／＼けん

夕立

鳴神の御出と見えて金紋の光に鑑もふれる夕立
千代能か桶にはあらて雲の底ぬけるはとふる夕立の雨

泉

春風に水をとさし岩清水また手にむすふ水無月の頃

納涼

隅田川名酒くまんと夕すゞみかん田をかけてこき出す船

樹陰流水涼

風にむかふ島より船にのり出せばうれしの森の下ぞ涼しき

河夏被

水も火となるはとあつき御祓川大蒲焼のいくしやすなり

秋之部

立秋

ねつてつので地獄も西の秋来ては極樂となる風の涼しさ

種は夏の隣へはひいて、あき地にひらくけさの初花

七夕

七夕のあひて話のしつけさに牛もよたれを流してそさく

七夕橋

鶴と紅葉のはしをふたつ文字半の角文字こよひわたして

七夕契久

一とせに一度々々と七夕のいく萬年もつきぬむつこと

萩

女郎花萩か花妻なみぬれはなまめきわたる萩のうは風

萩如錦

むらさきの花の衣に七條のけさは錦のはきくの色

薄

武さし野に追風吹けは逸水とはげし狐の尾花葛花

刈萱

秋の田と夏の畠にさく花はむきをかるかや稻をかるかや

關

誰人の野をなつかしきみ一夜ねてぬきおかれたるふち袴かも

曉女郎花

女郎花露もこほるゝ笑顔にはこゝろのこりの有明の月

雁

秋風のすゝ音たてゝ雲井よりのり掛てくる旅のはつかり

かり衣きぬの小紋と見ゆるかなきりのとはりにのりつけてくる

霧中雁

文月のきりの封めかたければすかしてよみし雁の玉章

鹿

萩はらに露のしらなみたちぬれば鹿のしからみ留てなくなり

露

塚の間に目貫と見ゆる菊の花露はさめほとおきたちにけり

霧

行かひの君は五丁の格子先きりの籬に見ぬつかくれつ

槿

牽牛の花にかけたる露のはしはた織姫の虫のなく野に

槿花殿垣

しける葉に垣ねもあつくなりぬればあせをしはりの槿やさく

關駒迎

西東あふ坂山の關角力年中行事ひきわけの駒

甲斐駒引

はうろくのやうにみえたる望の夜に都にいりぬ甲斐の黒こま

信濃勅旨駒引

ひきぬきの逢坂山のいもつなき信濃さそはのきりばらの駒

秋夕

十五夜

かり本のかなの文字のよみやすく七八九まで秋の夕暮
今川にうつりしかけもまん九くみなぐそくせし仲秋の月

月前風

雪花と雲のそらこと秋風にうそふきはらす月のさやけさ

橋月

空色の袷は秋のはれ着かや昌平橋の月のこくもち

名所月

武蔵野にすゝきをはなの波たつはいまみつ汐の秋の夜の月

擔衣

いもとせのつちときぬたの相性によを打わたるきぬくの音
さし向ひ妹かきぬたの相性もにはんてうてと音はからく

近擔衣

壁こしに隣をさけは小夜ふけて誰かきぬたをうち笑ふ音

虫

しけりたる鋸草のかれし野にひつきりもなきむしの諸聲

園虫

夜もふけぬ妻まつむしのふところちんちろり有りかんをかけはや

鳴

身代にさんちやく茄子をきらせてそ鳴立ち去りぬ秋の夕暮

蚕

針はどの聲をいたしてきりくすつれさすてふ糸はさの本

菊

紅葉賀にあらてかさしにおく露は光源氏の袖垣の菊

九月九日

十露盤の玉の露おくしらさくは九々の節句をたかへすにさく

紅葉

林間の酒に酔ひたる紅葉見にあをみ上戸は松はかりなり

谷紅葉

霧はれて見えし紅葉のひの衣けさもにしきの僧正か谷

残暑

秋かせにむけは猶また土用よりあつくなりたる姫爪の皮

九月盡

かりはしてとり残されし捨案山子秋はて顔に見ゆる小山田

冬之部

初冬

はつ時雨けさ山人もさむさうに簑着て里に冬は來にけり

風知落葉

豫讓にはわらて紅葉にふくあらし錦の衣きりちらしたり

杜落葉

山かけに茂林脩竹の瀧の川冬は落葉のさゝの曲水

關路落葉

木からしの吹きゆく旅の山道もみな落葉しては、かりの關

時雨

駒どめのせをわけてゆく時雨にも片葉の芦は何としつらん

霜

熟しする頃どて柿におく霜のしろきを見れば粉そふきにける

橋邊霰

たゝきたつまな板橋の音さけはこや納豆の豆霰かな

屋上霰

天狗風つふてをうつか玉霰いたやのひさし音もすさまじ

雪

つくるどもはくをはさらふ雪佛眞白に木地をふりかくしぬる

山雪

麓よりつもりつもりて大空へけさつくは山みねのしら雪

河雪

冬川にちらくとしてきゆれとも築にはかゝる雪のしら魚

浦雪

しのゝめは守袋の赤地かやにしきの浦のあさのしら雪

社頭雪

稻荷山白狐の尻の玉垣に光をはなつ雪のあけはの

雪似花

白妙の雪の上野の鐘樓堂夜もあけ六つの花盛りなり

寒蘆

高綱にあらねと志戸の浦かれにあさ瀬をふむか芦もこゝえて

千鳥

荒磯の千鳥の香爐しら波の手に渡りてや行へたになき

海邊千鳥

和歌の浦みそひともしの夕波に千鳥のあどのちらし書して

浦千鳥

壇の浦今はむかしにかはれとも千鳥はやはり八さうもどふ

水

水鳥のねやのふすまに神無月さむけしとてか氷はるらし

水鳥

綾瀬川水のなかはをたちさるは孟母にゝたるをしの飴羽

網代

はたよりて波にあやとる紅葉はの錦をまきの島の網代木

神樂

庭の火のかけに天戸のあけ鳥ともにかあゝ朝くらの聲

鷹狩

かり人もいつれ左をもちふれは雪にしらふの鷹はすゑまし

炭籠

たちのほるけふりは雪の峰と見せ冬をあさむく炭かまのもと

埋火

ひる寒みちしむ此身も夜半なかくゆるりのひたる埋火のもと

除夜

掛乞に人をやれども晦日の夜つきもないこといひて越年

山家除夜

とし越のはらひもとらぬ草の庵手にとるものは山寺のかね

戀之部

初戀

一目見てふるひついたる君なれば身はいどはしなこにはたたくとも

忍戀

しのふ身は泪の雨もせきとめてむねのつゝみはたえんかたなし

不遇戀

石波とにかたく契りし戀人にみとせもあはぬ身の上そらさ

後朝戀

かひしめてかへらんとすれば庭鳥のまたとけこうとつくる曉

初逢戀

君とけふはつねの日する霧の間にとこよを引てまつそうれしさ

遇不逢戀

なまぐさき鍋をはなれてわれくにぬんのつるのみ残る戀しさ

旅戀

返事せぬ妹にしひれをさらされてけさたちかぬる旅の宿かな

思

人の目をつゝむ荷物になふたらあまらおもひに腰をぬかしつ

片思

とりもちてくれる人なき片思ひかるき我身におもき君ゆゑ

恨戀

二世までといひあはせたまも繰きれてうらみころのみ残りぬるかな

曉

一夜妻旅の枕のみよにつくゑりもと筋やあかつきの鐘

雑之部

松

むかしより今にかはらぬ尉と姥幾代経ぬらん高砂のまつ

竹

うくひすの歌よむ藪のてに葉よくたけ長々どのひるわか竹

鶴

千年の齡も長門いんろうのまさゑをわさる眞砂地の鶴

苔

尻つへたくされついたる達摩石ともにはいはねの苔衣着て

山

時しらぬいつもこの花さくや姫としや二十の山といふらん

河

名物の麻も眞白の奈良晒あらふてかける掉川のみつ

野

大黃もあれはおそれて鬼あさみやさしく開くしめしの、野へ

關

休む間につれば先へとすまむらやいなはしり井てあふさかの關

橋

物洗ふをんなありともゆく人のおつるせはなき久米の岩橋

海路

難波津をさくや此船のりいて、けふは海邊をゆくや金毘羅

旅

東より矢はぎの橋をうち越えてけふ九重にいるそうれしき

別

ゆきあはぬ空に燕と雁の聲逢ふはわかれのはしめなりけり

山家

暦なき深山の奥に住む人は花見てそしる春の彼岸を

田家

われか田へ水をひかふかひくまいか只うつちやつて小桶はかりそ

懷舊

手習をせしいにしへはかな釘のをれもおまへもかきし友達

夢

あしき夢見ても跡なくなりぬるは馬喰町の宿の曉

無常

六十圓三遍めくる長いさも多葉粉の烟といつかきえなん

述懐

むつくりとおきるといなや三度つゝめしもくらふの世の中をかし

祝

金鏡のよろひかふとく大小のきることみなき御代のめてたさ

長歌

文かはる 十三すしの ことし哉 はやあら玉の ことはしめ 春のあしたに
 引いどの 霞にかゝる 雁かねや 二十五けんは 唐のうた 百間長屋 懸路
 川 春のはつ風 ふき自在 若荷といふも草深き 山の手生れの 青山子 牛
 天神の はなどほす 梅が香ならて 引繩に ひきいたされし 船の友 こ
 れ江戸川の 中間なり 水道ばしを 乗りゆけば 大吉祥の 森山下 うなき
 のやうな ぬらくら者 くしになるてふ 竹町河岸 さし合もなき 會はしめ
 はつ爐開の 御茶の水 茶湯の釜の 神田川 櫻の馬場に すみたまふ 大あ
 なむちの 大ふくは うす茶こひ茶に する河臺 外堀小堀 遠州の 舟にも

にたり 和泉橋 どうく地口の あたらしはし やれ淺草と ゑみふくむ
 むたはさらりと 柳はし 大のじかへ といひしなり これ萬八か しらねと
 も また藏前で 酒の升 それてこつちも 梅かはと 種河内やは 隣なり
 今に幾代の 餅もすき 右と左の 両國はし 淡雪奈良茶に なみならふ 無
 縁の山人 法界寺 やらしといめた 朝日丸 あらて淺間の 虚空藏 洒落は
 芳村 お辰さん うそをはつかぬ 本店の 回向院の 鐘樓前 角田河原や
 都鳥 藝者をたれそ よふこ鳥 三木三鳥の 傳授より 古今これらが 面白
 き 極秘の一卷 おつひらき 江戸市川や 流行の 男を立川 談洲樓 馬馬
 大臣 下戸なれば これを正氣の おかしらなり 鬼尾をつけて ほめ詞 わ
 しが爲にも おやじふん しらふの鷹も 左りさく するひさしくも 目をか
 けて かむる頭巾の かわゆかり きつとはなしを する時は おまへの氣性を
 鳥ちかひ せぬからせうぞ 堪忍して 小言は御免と 手をついて 關東なま
 りの 聲あけて 平々山人 アヤマツテ申壽
 酒くみて極樂世界に遊ぶ身をしからばいやよ馬馬大王

文かはる 十あまりみとせの ことはしめ むつまし月の あけはのは まつ
 門にたつ 大門を ひらけは春の とし玉の 扇々の 聲高く 春のあしたの
 三ッ扇 けさ御禮も 角町と 末廣かりの五明樓 家に名高き 花扇 その元
 日は 子の年と 二日の朝の 日の鏡 さて昔初は 橘の 千蔭の大人の 筆
 の跡 みごどにうつる 琵琶の湖 須磨も明石も 外ならず 源氏らしくも
 難波江や 京江戸町の むらさきは あけをもうばふ 墨田川 墨河主人は
 家の君 名にし東の 都鳥 いさごとくはん 渡し守 木の母寺の 梅若菜
 まりこの宿の とろ汁 これは岩井の 松の君 かけてさかゆる 住吉や
 池田伊丹の 灘の酒 とその薫を 久米三さん 鳥渡肴の 諸初め 高砂の浦
 はのくくと 淡路の國の 島臺に 蓬萊さん寶 よそならず 君のめくみを
 うけたさに 大和屋めぐり なしつゝも 名筆古跡の 面白帖 歸る三河の
 國ならて 千代くり跋を 杜若 江戸一番の 色事師 つはみの筆の 子引町
 親子三人 顔見せは 三ヶの津かも 子の年や おもいれ 大氣を はるな
 れは 東の都 朝日丸 日の出を壽く 舞鶴や 芝居の三階 松さんと 久米

三さんには 富士ひたひ 三國一人 外になし 此所作事を 三保の浦 錦の
 羽衣 さかざりて 天津乙女の 如くなり また江の島の 三美人 作もはね
 たの 辨天と 三浦三崎や 安房上總 一目に見たる 江戸ツ子の あたりは
 つさぬ 御影堂 扇にあてる 紋所 外に中村 勘三の裏 内榮町 富貴家町
 新材木の あたらしい かごにあなたは 乗物町 長谷川町の 長ぼうで て
 りふり丁の いとひなく 新塙新川 うちこえて 三十間堀 河原崎 乗込日
 より 大あたり あたり近國 岩井ても しれし御事 萬國まで 光かゝやく
 朝日丸 三つの扇の 日の出の車 丁子車の かんはせは 大千世界 かは
 よさん 引たてたまふ いきはひは 天下にならぶ 者あらしと 岩井のうへ
 に 大岩井 岩井くゝて 壽ひたり

文

戯園采芳圖をほきて

三升の鯉成田の瀧に出世をみすれば秀佳の花蔭雨中に流行す江戸の水の杜若花

ひらさきに名高ければ紀伊國屋の櫻曙の山に色めく梅幸は花の兄なりと春の巻
 頭になはれば松江も三光のひかりをます久米三は名をあげ羽の蝶と舞ひあかれ
 は三紅の桐座芽を富貴家町に榮ゆ瀬川の美人菊之亟の花をひらけは松之助も丁
 子車の薫を引く金五郎は助高屋の子穂とあけらるれば秀朝の笑之助淺草の笑市
 よりもはやる中村の舞鶴大空に羽をのせは龜三郎も萬屋を壽きて坂東一の薪水
 になる若太夫の銀杏は中村の名木とあふけは高麗屋の錦升天下一本の松本と壽
 くこの取組のさはき役は助高屋高介名人聚珍の親玉々々と替詞をかけものとな
 しし人物は關東なまりの平々山人なりと云爾
 文化十三ひのえの子とし顔見せ繁昌の日

朝顔の記

文化八とせの頃よりけふ九重の都のかたてならふはしめの難波津や又鳥か鳴東
 路は東雲の頃よりも朝かほの花を樂む事のおほかりければことし文化十あまり
 三とせ丙の子のとしはつ秋より最中ちかき文月十九といふ日淺草みくらまへ祇

園の社頭大圓寺にてはしめて開筵ありて花の甲乙を品定して相撲番附てふものとなしつ奇品百珍朝顔花合の會主は下谷二丁町小山歌文齋また和泉橋の通り植木屋佐助孫七金兵衛甚兵衛吉兵衛とて六人のひさき人なり朝かほの花合の文をつらねしものは秋水茶寮述鏡笠隠居馬琴の代撰ありて出版の摺ものあり秘藏す

そのあした花合のふもしろさによめる

關東平々山人

あさかほの淺瀬高直をあらそひて

けふ宇津川の合戦となす

と狂しければあまたの人々ぞよみぬ

抑釜の由來といつば大日本は神國にて籠の神を祭るへし鳥かなく東のかたや陸奥に御鎮座まします鹽籠は正一位大明神とそ尊も高き位につき給ふ 吉備津の籠は是に次ぎ朱の玉垣の神秘となり湯花神樂の大籠は御神託をそつけたまふ唐土にては郭巨か孝心の徳により小かねの釜を掘えたり我朝にては小道具屋家業目利の行により名器の釜を掘出して家の富みたるためしもあり其御釜は千の利休か師となりて四疊半の數寄屋園み珍々先生とそ名乗ける權兵衛釜は引替て田

舎住居の樂隠居須磨の浦邊の鹽籠はまつ風むら雨の妾を抱へよし町の御釜は出家と契りて小金を孕み本庄の釜屋堀に生れては五百羅漢のたきだしをなし老たけては持廻りの質餅にかつかれ水溜堀井戸の側となつては火の用心の月行事を勤む月夜に釜を割られしと大屋へ尻を持ち行はさいはひ店子に鍋釜いかけしきに直して事すみぬ地主の釜は臺所になはりてまかなひ親爺となり小釜は多葉粉盆に入て見世番の小僧を勤む盆と正月は地獄の釜のふたあきを待て敷入に出る朝鮮に釜山海あれば日本に釜ヶ淵石川五右衛門が釜うでは芝居の釜の張ぬきに残り三升たきは役者となつて成田屋と名乗り ○ぬくの はたぬきをして太平釜をはさちらすおとつさんの高麗釜は籠の神をおいさめ申かよいわいと拍子舞にのゝしる真鍮の釜が甘酒をこのめばお多福釜が籠の前で笑ふ伊勢釜が太々神樂をいとなめば富士形が川垢離をとる光明皇后となりたまひては千人の肩をながし丁子風呂をたてゝは男女えならぬ薫をとゝむ白隠禪師の遠羅天釜を見れば達摩釜の悟をひらき雲龍釜が天上すればあられ釜の玉をつかむ十王釜がにらめば鬼釜がちゝみあがる舛形が水をはかればはかりめが貫目を引く小田原町に釜

鉢あれば鎌倉に陣釜あり鳴海釜がふきんを絞れば壺釜が路考茶を染る蘆屋釜の下で葛の葉をたけば狐釜が性をあらはし鯨形を瓢箪口でおさゆれば丸釜がすべりだす八里半が釜入をすると放下師が釜ぬけをなす流しで釜の尻をあらへば柞味噌がひちりんで腰をあふる阿彌陀堂が念佛をまをせば妙法寺釜が題目をとなふ織部形が上懸を誦へば下釜が舞臺をふむ文福茶釜が踊出せば鼓形が囃をはじめ太鼓釜が音をたつれば與二郎釜が自在つるのさるをまはす鶴首が舞ひあがれば水がめ形がはひいだすお籠拂が罷出て釜の數々よみたつればあまたの釜の神おろし天神釜や 天王窟 清淨 村長 淨味釜 淨榮 定久 定林釜 定甫宗甫に 道也釜 宗珉 大萱 妻木釜 赤津 信濃に 落合窟 彌助 尻豊 鶴釜 祖母懷窟 ウバガボツボト ウヤマツテ申ス からくど鈴釜をならせば荒神様のおよろこび其餘の釜は數多く残りの釜は藏にいれかまくら河岸とは名付けたり

男をたつる雁金の文七ならで清吉があやまりました手をついて

平々山人述之

又

去年の秋の釜のせりふの後篇なり

花の大江戸の通人が古きをたつねてあたらしき趣向をかきしも京橋の山東庵のお爺さま〇ぬといふ稗史を書き世に行はれしを聞き事あり其時うつりて成田屋の三升主人の伊達衣裳〇ぬといふ縫をして戯場のはまれを高くわけ鎌と釜との文字ちがひあれとかまわぬ地口にて長口上をまきだしたを鎌でかつきる様にかつけなすまたそらもなき人もあり同氣もどむる野暮助あり東坡居士にも前後の赤壁范氏范固の前後の漢書我日本に泉州甲州人に生死のふたつあり本末なくんばあるべからず此のおと釜を引かけと釜のお尻の墨すりてすり子木筆をあたへられ古すりはちをかきまはすことゝはなりて筆すさみをさな遊びのその時は鍋屋のお鍋をしゆうに入れ鍋のくそこぬけ鍋と子供同士のその中に味噌べつたりの汁鍋ありくるり並べしそのさまは慶切記のまゝ子算またいれ子算の鍋の敷筑摩祭にいたゞきて夜鍋仕事の店おろし新鍋割れしこのしだら鍋釜なほし

のどくいなり小鍋さげるは夫ウツのため小鍋だてする居つゞけ客おらがかりの焼餅鍋鍛冶屋にかゝるは中鍋よ大鍋島は御大名東下りの業平鍋須磨にござるが行平鍋千僧供養の鍋ならで坊主わたまの丸鍋も相摸女を播磨鍋金鍋銀鍋いり鍋で我庵室サのから鍋も日なしにとられる店の鍋天のわたへどわらがねの土鍋ひとつに赤坂の鐵燒土鍋で命をつなぎ此の兄弟は商人にて鍋吉鍋藏鍋太郎鍋二鍋六鍋五郎鍋八鍋右衛門鍋左衛門神田の鍋町山下門南鍋町にみせを張り赤鍋鐵鍋からかね鍋ふだ鍋つる鍋敷まで仕入れて置きし其めぐみかん鍋にかんをかけいり鍋鍋焼買もありかせぐはからだの藥鍋薬鍋錢たんとまふけだしその宗門は法華宗鍋冠の日親を信心するもいとをかしまだ唐土のからかね鍋朝鮮鍋を生け取つてうぶ耳塚たてたればさつまの鍋も琉球鍋を手鍋とす本庄で焼く瓦鍋やくや煙の今戸鍋いま泰平の御代となり千歳をことぶく鍋鶴に鍋がねで鑄る水かめは萬代までも残るべしこれ日本の本の用心水この長言をおしなべて鍋のすみからすみまでもなべかわからぬ洒落鍋は眞平鍋と手をついで關東平々先生ホ、ウヤマツテ申すこふもあろふかつるもねへ

お鍋では外に中村歌右衛門さけの勘座の道具なるべし
文化十あまり一とせ霜月顔見せを見てやらかしぬ

關東平々山人

附録

平々先生傳

平々先生は何許の馬の骨かしらすと何者の菟兒が云ひけん正しく傳通院前白壁街雁金屋に安永二巳年八月生辰して粵に平々たり氏は青山名は清字は吉甫氏をもて青山堂と號す天才卓出ありて楊柳風流可愛され歌をよく詠じ橋洲大人の門に遊び琵琶磨と唱へもはら家の業をおこたらず貨殖をなす去年の春ふるきによつて偶百川の會盟に豪酒し家に歸りずふろくとなり其夜ふしたる夢にいとあやしき鬼のかたちの右の手に筆をとり左に金をもち今日百川の遊び樂しい哉我は是れ汝多年信ずる文昌星なり今よりして世にすたれたる古き搬演傳奇の類ひをつとへ藏とせば家の重寶なるべしと七分の鐘に夢さめて平々然たりまさるに文昌君の勅を蒙り是よりしてそこはかとなく集めものし千まき文庫と號ししに今ははや萬巻にあまり棟につかへ牛に汗するに足りぬ嗚呼此の文庫にさがせば春の日の遅々たるも短きこゝちして昔のあと見るが如し將におそらくは今の古を

視ることまた後の今を見るがごとしと吾もまた平々として題之

文化辛未年三月八日

紀 東

同

重陽にこなからの工面も出来ねと五柳先生とて自號の傳を作りしも名は物のいらねはなるべし余こたひ此傳を作らんとて紙上に平々山人の文字を寫して沈吟歎刻に及ぶ時に新參の塾生が詩學楷梯のなま物しりに問て曰平々たる山人とせば二四不同の掟をいかん又山人の傍に^呼の星を置く物か余黙して不答しばらくして又問て曰しからば書經の王道平々歟平の音は便也關東便々とは關東連小便の謂なる歟余又こたへず亦曰みやこ人は關東平といふべいべいこと葉の謔もあれば關東べいべい山人ならん余はじめで欣然として其意をさとし蕪莖にはかゝる一趣向を我が知り顔に題すること爾

きのとののきく月徳本行者の旅行を見おくりて木像の行燈の陰に眠り七分坊主の拍子木をきつかけに目をさまして

盡 園 識

夸々先生傳

書肆青山堂主人、名清、字吉畝、住東都礮水無量精舍前、相識日久矣、爲人滑稽機辨百出、百新人聞之莫不解頤者也、又能飲酒詠狂歌、稱枇杷丸、今歲將起青山文庫、其所蒐之書、既及千卷、他文房器、金、石、雜物、一無不備也、則自號夸々先生、以張大其事、就人遍求、選其傳、余亦與焉、夫夸々之爲字、義說文、夸者語平舒也、書有王道、夸々、夸章、百姓平秩、東作平在、湖易等之語、可併見、今人與尊長語、及事之宜者、則對以稱夸、猶華人於唯諾也、今又先生重一夸字、稱平々者、蓋敬之至也、嗚呼、夸々之子、之志可謂勤也、凡人在平世、我既平、衆則人亦平、我既不平、則衆人亦不平、然則弄平何矣、是所平之由起也、況生於平々之世、行平々之道、守平々之業、作平々之飲食、作平々之樂、是亦難能、似有命矣、傳成書、以示先生々々、授之頓首百拜、欣然一笑曰、平々々々、永以將傳子孫、文化幸未端、午後二日

友人 自適子選

青山堂主人一日客と舟を泛へて兩國橋の下に遊ぶ清風徐に來て水波おこらず杯を擧げて客に屬しひめもすのみかけ山の寒鴉くるころ楫ひきよせて枕とし胸々たる斯景中に赤衣の老翁忽然とあらはれ善哉々々我こそは赤本先生なり其昔岡

清兵衛が作り初けるより鱗形屋が家にやしなはれ漉かへしの上紙にすられて見置の爲めにもてはやされ官女宮娃の手にふれて源氏狹衣と肩をならべしも今ははや民間におちくだりいそのかみ古本屋の見せ番となり果は屑籠の底に墮在せられあるは紙帳天徳寺の破れをおきなひ又は行燈掃除にひきさかれ紙屑買にもうとまれはて終には道路に捨てられて饑たる犬の腹に葬られんも是れ我がかなしむ所なり願くば今我がくるしみを救は、汝家信日僂侍あらんと云ひすて、其儘かたちは消てうせたりし主人奇異の思をなし枕をあげて何にもせよ夢か現か幻か我書林の家に生れ陳喬翰の青表紙をひさぐといへどもいまだ赤表紙の浮沈を知らず今先生の告を蒙りしうへは心命ををしませ黄金を擲て先生の危難を救はずんばあるべからずと稿の財布の紐をといて四方の估書客に託し屏風襖の下張までさがしむとむれば破れたるも全きもそれく、に携へ青山の店頭にきたるありかへるあり其の集散する事恰も雲の如し日あらずして天下の赤本あつまりて牛に汗し棟にさそふはた裝潢なりてより杏花園先生の玉手を勞し標題に小序を書加へ其の部類をわかちて青山千卷文庫といふ唐の四庫にもおとりやせんと

主人の高慢顔は材木屋の蔭よりもたかくとまりて長柄の橋の鉤屑井手の蛙の干物も昔々の好事家なりと今度都下の諸名家をつとへて二百年來の古書雜器等の大會を湯島なる大聖殿のうしろ雲茶店上に開き此日の掟とて杏花園先生自筆を採て年代は二百年を限り品は五種をかきれりと此の日素見物は御無用と書れたり然といへども四隣の傭人つとひきたりて觀を乞ふ者夥し於此これを示す時は皆あきれはてたる顔してあたらずを費し如此の破れ反故を求るは狂人の所爲にあらずやと云ひてさゝやくもわり又はあざわらひてかへるもあり余曰しからず是みな傭人の譏する所にして大人君子の畠にあらず古人も又いへることあり子孫に黄金をのこさんより寧一卷の書にしかずとは是道青山堂の謂乎

文化八辛未四月十八日此日也曉來雨霽青葉帶露杜鵑亂啼卯花滿籬閑窓清興可愛于時採毫汚於白州刺史

東都森川渡口 老樗 釣夫

同

青山堂の主人いにしへをこのめと東坡の墨竹もはんし物の團扇にしかすとし貫之の假名ふみもこきん節の正本はどにうれしがらねば寶をもつて寶とせず紙屑

をもつて寶とす

昔袖たんだふりたるふる反故に六尺屏風張たつる見ん

長座の客の世事談は聞もうければみしか夜の燈下に彼翁の獨語をまねたり

文化辛未

京 傳

同

青山堂平々先生其の傳を諸先生に請ふ家兄京傳も傳連中の仲間にて予もまた傳せよと傳言あり先に諸君の述べたる傳々々の音たかく今さらいふは愚智文旨布鼓をならして雷門を過ぐるがごとし故に家兄がしり尾につきて俳のちからもいとよわし

郭公耳かたふけよ青葉集

此の集は先生の御秘藏諸君の水くさなりけり

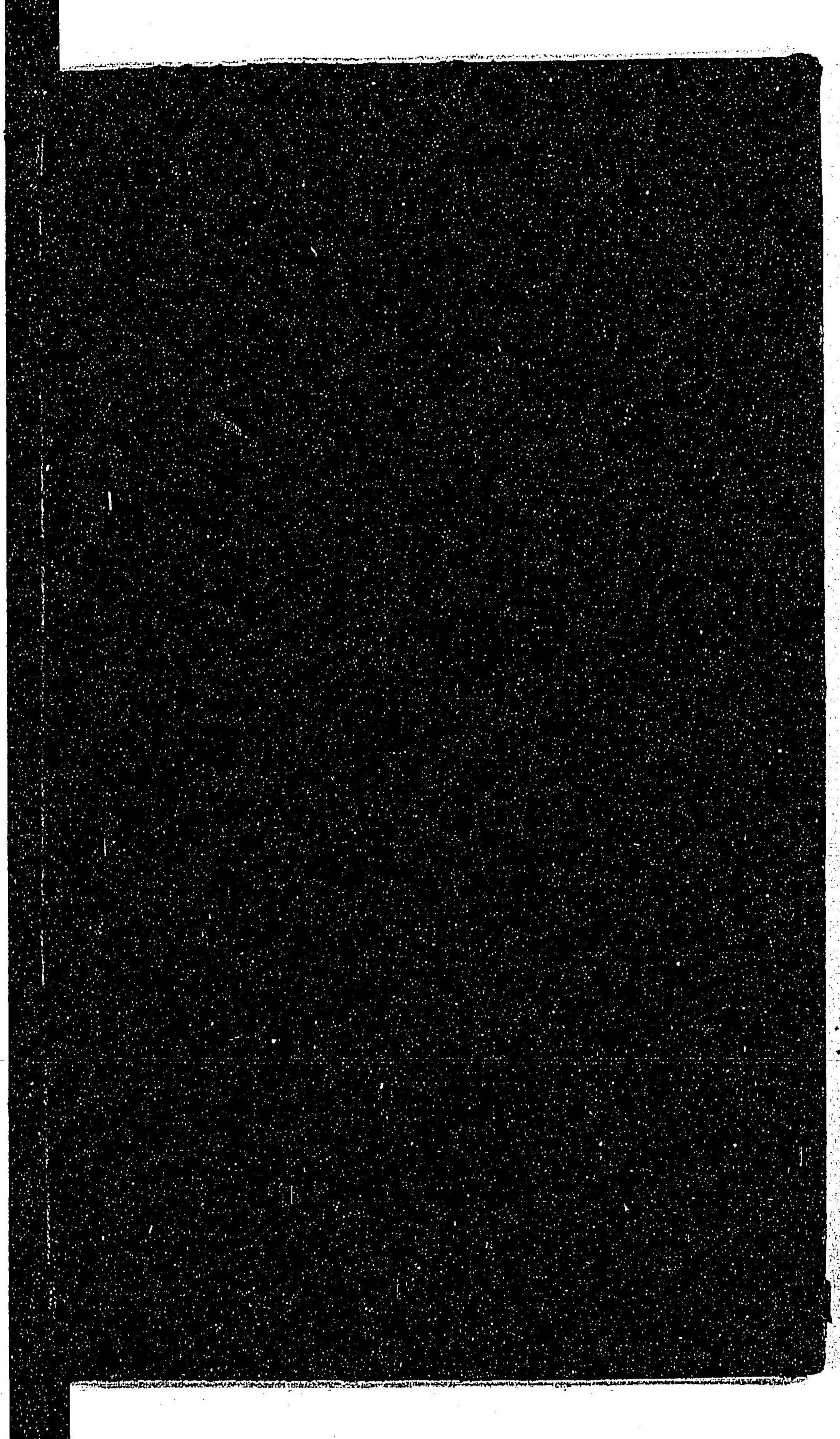
文化辛未卯月

山東京山識

文化文政の士登りて高時風雅の士留山馬
 琴高傳おの法多事と相交りてはなまを奉る
 とらを認めし古昔白鶴とてはなまのまを
 文庫とてし和漢の書とてはなまのまを
 山平の山人にてし七十年果のまを奉る
 以てはなまの清書とてはなまの法念とてはなまの
 まの書とてはなまの法念とてはなまの書と
 撰えしはなまの書とてはなまの書とてはなまの書と

246
25

國朝
正統
六年
春
正月
朔
日
御
筆
題
詞
於
此
山
中
之
景
實
為
絕
倫
也
御
筆
題
詞
於
此
山
中
之
景
實
為
絕
倫
也





085588-000-1

246-27

吾孀なまり

平々山人(青山清吉) / 編

M41

DBD-0056

